

## 金曜コラム - 障害者スポーツ:勝利至上主義が生み出したもう一つの障害 ミン・ソリ(ナザレ大学外来教授、リハビリテーション博士)

現在、インドネシアのジャカルタでは障害者アジア大会が繰り広げられている。長い時間の汗と努力がもう一つの宴を介して結実を刈り取る瞬間だ。ただ私達は結実=メダルという構造で選手たちに接する。このような勝利至上主義の弊害は、「視力 1.0 だが視覚障害者選手として...『でたらめ』スポーツ等級論議」という記事を国民に届けた。「公正な参加の機会を奪われた障害者が存在しているのです。」との報道内容が本当に残念だ。

一般生活体育の現場で活動して障害者体育に接するようになり、障害当事者の家族として生きながら、体育活動が障害者のリハビリや社会復帰、生活の質の向上などにどのような影響を与えるか切実に感じるようになった。いや、障害を持つ人が体育活動を通じて社会復帰をする姿をそばで見ながら、そのメカニズムが気になって勉強もし、障害者スポーツ活動もするようになったということが正しいようだ。

私たちは、生きていきながら小さな成功体験がその人の人生に刺激されてそれが新しい挑戦につながる姿をたくさん見るものだ。障害者にとってのスポーツ活動はやはり身体的・心理的に非障害者のスポーツ活動の効果と同じだが、それに加えてリハビリと障害受容という単語が含まれる。

ところが、その逆にスポーツ活動の中でかえって挫折を経験する場合もある。例えば最初のアプローチで自分の障害特性に適した種目を見つけられず、障害者の間でもむしろ挫折を経験することもある(金曜コラム 2018年5月18日参照)。これと類似したことがまさに等級分類である。

韓国の障害者には特別な数字が付与される。まさに障害等級制である。障害者福祉法上、15個の障害に分類され、1-6の等級に分類される。1級は最重度であり、6級に行くほど軽症の障害である。障害当事者は、長いこと障害等級制の廃止を主張した。彼らは話す。「私たちが牛肉か何かでもないのに何の等級を！」障害者は共通して障害について一般的特性があるとは言え、それぞれの日常生活をしていく特性は非常に異なっている。たとえば、同じ部位の損傷で脊髄障害になったとしても、彼らの生活パターンは非常に異なる。これらの障害を6つの数値に分類して、同じサービスを提供するということが自体が問題である。むしろ身体特性、生活環境、個人の環境など、さまざまな要素を介して、それぞれに合ったサービスを提供することが適切で望ましい。

大韓民国障害者に運命的な数字、障害等級制があり、障害者スポーツ活動をする人には等級分類というものがある。ところが、誤った評価分類の場合はすでに優勝は決まっている。たとえば、ある種目でいつもメダルを取る選手がいる。その選手は脊髄障害者であり、具体的には硬水損傷である。彼が種目参加のために等級分類を受けたとき、まず彼は硬水障害で1次分類される。そして手の使用に問題は全くないが困難があると答える。そして他の選手たちの中で同じ評価を受けたが実際に手を使用するのに困難が多い人がいる。一般的に硬水損傷の場合、手の使用が自由ではないのが特徴である。しかし、全体がそうではない。非障害者と同じように手を使用できる場合もある。前者は常に優勝をするし、後者はいくら努力しても絶対優勝することができない構造的な状況が作られる。当事者自らがそのような行動をすることもあれば、良い競技記録を出さなければならぬ指導者やスタッフの強要や協議によって起こることもある。私たちは周辺であまりにも多くの障害当事者からこの問題に対する不平の訴えを聞いたりする。そして実際そのようなことがあるこ

とを知っている。しかし、この問題を改善できる人が誰も改善しようとする意志がない。等級分類の場合、「障害を正しく知っている」医療専門家だけでなく、特殊体育専攻者、種目の専門家など、さまざまな人で構成された委員会を経て進行しなければならず、選手選抜試合を観戦したりビデオ撮影判読などを行ない、状況の診断評価を介して最終分類をしなければならない。また、選手たち自ら評価に取り組み正しい姿勢が必要であり、不正に対するペナルティの適用などの内部自浄が必要だろう。また、種目と体育会の役職員のメダル数にこだわったシステムではなく、スポーツ本来の意味を基本価値に置く政策とサービスサポートが必要である。

私たち国民もこれ以上、勝利とメダルでスポーツを楽しんでばかりいない。その後ろに誠実さとフェアプレーなどのスポーツ精神が支えていてこそ拍手と賛辞を送っている。一般体育と障害者体育を離れ、もはや成熟した国民に失望を抱かせる勝利至上主義の墮落したスポーツは歴史の中に葬り、皆が楽しく誰もが拍手を送ることができる真のスポーツの歴史を書いていくことを願っている。

## 01 アジア経済 2018.10.7

### 【 “だめな理由ばかりたくさんあるのに” . . . “兵役特例制度”1年以内に改善？ 】

"1年以内に改善案をつくる。"

政府は2018ジャカルタ・パレンバンアジア大会で再浮上した芸術・体育要員の兵役特例制度の後続対策を出すと言って釘を刺した状態です。兵務庁と文化体育観光部の関係者が中心となった専門チーム（TF・タスクフォース）が発足して定例会が予告されるなど、制度改善のための動きが加速する見込みです。しかし、現在明らかになった代案が以前から議論されていた案を根幹とするうえ、各対策ごとに欠点がおびただしくて実効性のある改善案が出るかどうか懸念される状況です。

兵務庁と文体部が主軸になった「芸術・体育要員制度革新実務TF」は先月28日に顔合わせを兼ねた最初の会議をして、去る1日から活動を開始しました。金テファ兵務庁次長が団長を務め、兵務庁の社会服務局長・社会服務政策課長・規制改革法務官・現役入営課長をはじめ、文体部の公演伝統芸術課長・体育政策課長・大衆文化産業課長などがTFメンバーとして参加します。TFは、今後1年間、毎月1?2回定期実務会議をして、外部の専門家役務と公聴会、世論調査などを通じて兵役特例制度の改善案を作成する予定です。ここで出てきた改善案を国防部が兵役法改正案などで法制化する方針です。

◆兵役特例制度、廃止の代わりに条件を強化=現在の体育分野を中心に引き上げられている代案は、▲累積点数制 ▲才能寄付奉仕活動の義務付け ▲体育団拡大 ▲兵役義務の猶予および退職後の才能無償提供 ▲代替服務分野の拡大など大きく5つです。これは、韓国のスポーツ政策科学院（前韓国スポーツ院）主導で2015年に発刊した「体育要員兵役特例制度改善案」の研究報告書に収録された内容と似ています。文体部は先月19日に報告書をベースにした懇談会を通じて、兵役特例制度の廃止より公正性と公平性に適合するように資格基準を強化する方向に議論の方向を定めました。

兵務庁も兵役特例基準を強化することに焦点を当てています。ただし議論される選択肢が利害関係者の反対で最近数年間、漂流したという点で、今回も合意点を見つけないのが容易ではないという見方が出ています。研究報告書の作成を主導した金テヒ韓国スポーツ政策科学院選任研究委員は5日、スポーツ文化研究所の主催で開かれたフォーラムで「累積点数制と才能寄付奉仕活動に関する事項のみ兵務庁と話し合ったレベル」とし、「他の改善案は、関係機関の支援を引き出すなどの協議が必要である」としました。

◆体育界の反発・体育団廃止、技術革新は、幾重にも重なった山中=スポーツ界で、いわゆる「マイレージ制」に言及した累積点数制は兵役特例が適用される国際大会を拡大して入賞の成績を点数化して一定基準を超えた選手たちだけに利益を与えようという趣旨です。現在のオリンピック（1?3位）とアジア大会（1位）だけでなく、種目別の世界選手権も含めようという案です。100点を基準に、オリンピックは銀メダル以上、アジア大会は金メダル2個、銀メダル4個をとったら取得編入資格を満たす形です。2014年仁川アジア大会を前後にこの案が提示されましたが、競技人を中心にしたスポーツ界でこれに反発して制度化できませんでした。編入基準を適用した場合のメリットを受ける選手の数が急減して、国際大会での士気が落ちるとい理由からです。

才能寄付奉仕活動も選手たちの訓練日数や大会の参加、プロ種目などの日程を考慮すると、競技力に影響を与えることがあるという反発にぶつかりました。国軍体育部隊や警察庁、海洋警察庁（現国民安全所）など体育要員を拡大選抜しようという案も構想にありました。これは兵役義務と訓練、試合出場を並行するという点で副作用が少なく、国民の否定的認識を解消することができるという点が肯定的に挙げられました。しかし、2023年の義務警察制度の廃止と相まって、最近警察サッカーチームで体育要員選抜を中止するなど、体育団を縮小したり、なくそうとする動きが本格化しており、また、他の論議が起きています。

◆「二番煎じ・三番煎じ」改善案、今度は違うか = この他に兵役義務の猶予と引退後の才能寄付は選手たちの全盛期を考慮して入隊年齢を35歳以降に遅らせたり、選手生活を終えた後で技術を利用したボランティア活動を制度化しようという案です。特惠なしで兵役義務を履行するという点で国民感情に適合しますが、ここにも欠点があります。金選任研究委員は、「国家試験や他の分野の就業などを準備する兵役義務者が公平性の問題を聞いて、同じ入隊を猶予しなければならないと主張する可能性が大きい」としました。最後に提示された代替服務分野の拡大も、「兵役資源減少で転換服務（戦闘兵ではなく戦闘警察や消防員として服務）や代替服務制度も廃止する」という兵務庁の方針と矛盾します。

ここで芸術要員の兵役特例制度改善案も反映しなければならないなど、様々な利害関係が絡んでいます。スポーツ界の関係者は、「国威宣揚を目指し制定した制度が公正性、公平性という価値と矛盾している。利害関係者に国民情緒まで反映しては、どんな選択肢を提示しても特惠の連続だという反発が生じる。制度の廃止まで併せて検討する必要がある」としました。

<https://sports.news.naver.com/general/news/read.nhn?oid=277&aid=0004329213>

## 02 スポーツソウル 2018.10.11

**【 理由あった女子バレーボール'神戸惨事'..世界選手権直前セクハラ事件発生！ 】**  
一体何が？

2018国際バレーボール協会（FIVB）の世界バレーボール選手権大会（9月29日~10月4日、日本神戸）惨敗で世論の集中砲火を受けている女子バレーボール代表チームがセクハラ問題に包まれました。大会を控えて開かれた合宿でコーチングスタッフ内でセクハラ問題がさく烈し、これにより、そのコーチが電撃交代されたことが確認されました。

セクハラ問題の真実は、内密調査が必要な事項であり未熟な判断は禁物ですが、国家代表の養成所である鎮川選手村では、それも代表指導者が女性スタッフを相手にセクハラ問題を起こしたという事実自体が衝撃的です。出国に先立ってコーチが電撃交代されたのは、韓国バレーボール協会（会長オ・ハンナム）もこの事実を認知したことを知らせる決定的な証拠です。今回のセクハラ事件は単にバレーボールの問題ではなく、

国家代表選手のトレーニングと管理・監督を担当する体育会システムにも根本的な問題があることが明らかになったもので、事案の重大性はさらに大きくなります。国家代表選手の訓練の揺りかご（養成所）である鎮川選手村でセクハラ問題が起こったという事実は、韓国スポーツの恥ずかしい素顔を表わした大事であると言えます。イ・ジェグン鎮川選手村長はスポーツソウルの実事確認要請に「そのような事実が報告されたことがない」と明らかにしました。

現在までの状況を総合してみると、女子バレーボールチームの A コーチが女性トレーナーと選手村の宿泊施設で一緒にお酒を飲んだ後、セクハラをしようとしたことがわかりました。この女性トレーナーはソウルにある自分のボーイフレンドに電話をかけ鎮川に急いで来たボーイフレンドの助けを受けてソウルに上京したというのが、今まで知られているものです。そのコーチは酒に酔って覚えていないとし、セクハラの実事を否定していると伝えました。この事実は、次の日に代表選手団にも広がっていきました。大きな大会を控えた代表チームの雰囲気は急落し、女子バレーボール代表チームは、まさにだらしのない状態で世界選手権に参加したことが確認されました。

2018 バレーボール世界選手権に出場した女子バレーボールチームは 1 勝 4 敗で予選脱落し、世論の集中砲火を浴びました。1974 年以来初めて世界選手権本戦 1 回戦脱落という低調な成績表を受け取った女子バレーボール代表チームに注がれた非難は激しく厳しいものでした。さらに「バレーボール女帝」キム・ヨンギョン（30・トルコのエクザシバーシ）まで出場したのに予選脱落という結果はファンに大きな失望感を抱かせました。マスコミでは、監督の戦略不在と計画性のない代表選抜と運営についての強く批判しました。今回の失敗を「神戸惨事」と表現し、バレーボール界の自省と省察を要求しました。しかし、このような表面的な理由に加えてとんでもない醜いスキャンダルが隠れているとは夢にも知りませんでした。選手団の雰囲気を乱し、やる気を削ぐことになるセクハラ問題が大会直前に起きたという事実が確認され、事態は一波万波拡大する兆しです。今回の事態を契機に、今後代表チーム運営と関連行政に特段の対策が求められているのはもちろんです。

女子バレーボールチームの没落はおおよそ予告された事態だったというのが専門家らのおおかたの診断です。史上初の専任監督制を導入したが監督選任の過程で摩擦音を露出した紆余曲折の末、選任されたチャ・ヘウォン監督との関連首脳部の葛藤は、今回の事態を引き起こした目に見えない原因になったとバレーボール界は見ています。女子バレーボール界は特定の派閥間の根深い対立が常に存在しています。今回の事態もそのような延長線上にあるとの見方もあります。セクハラ問題が派閥争いの延長線上で行われたなら、それは狡猾極まりない犯罪行為に相違ありません。今回の事態を結果として予断するよりバランス良いアプローチと綿密な調査を通じて事件の実体的真実を明らかにすべきだという指摘が提起されているのもそのためです。

大韓バレーボール協会のオ・ハンナム会長は 10 日、チャ・ヘウォン監督と面談した後、今回の事態の責任を問い、次の監督の自主辞退を勧めています。チャ監督はこれまで自分が前監督であるため、任期が保障されなければならないと辞退を拒否してきたという裏話です。特に彼は、問題を起こしたコーチが自分が望んだコーチではないだけに責任を負う必要はないとし、熾烈な派閥葛藤の断面を見せたりしました。チャ監督は最終的にこの日、成績不振の責任をとって協会に謝意を表明したと報じられましたが、協会は「まだ最終的に受理するかどうかは確定していない」と明らかにし、微妙な余韻を残しました。

セクハラ問題と谷深い派閥争いで女子バレーボールはめちゃくちゃになりました。

「神戸惨事」で墜落した女子バレーボール代表チームの恥ずかしい自画像にファンの心が一つ二つと離れて

いきます。バレーボール界の悲しい現実が残念でなりません。

<https://sports.v.daum.net/v/20181011060010356?rcmd=rs>

### 03 スポーツ韓国 2018.10.11

#### 【 呉ジファン論議は正しく、宣ドンヨル国政監査は間違っている 】

「謝るか、辞退してください!」「そんなに一方的に...」「証人は答えるために出てきたのです」「私は信念を持って選びました」

野球代表監督初の国政監査証人として出席した宣ドンヨル監督は 10 日、ソウル汝矣島の国会で開かれた文化体育観光委員会の国政監査で選手選抜と関連して、信念を持って選んだと立場を明らかにしました。核心は 8 月のアジア大会で兵役議論のある選手を選抜する過程で請託を受けたかのかどうかでした。すでに宣監督は 4 日、記者会見で「絶対ない」と話しました。

前日の国政監査で再びこれらの質問が出てきました。正しい未来党の金スミン議員は「請託があったか」と尋ね、宣監督は「なかった」と答えました。まず金議員は、昨年 LG 呉ジファンの成績でもって国家代表に選ぶには選手本人も納得しにくいレベルだったとし、遊撃手のうちでいくつかの記録が下位にとどまっていると言いました。

これは今年の記録が良くないにもかかわらず呉ジファンが軍へのサービスを置き換えることができる警察庁と常務入隊を放棄したことを国民が最も納得しにくい点だと説明しました。この部分は十分に共感できます。昨年、呉ジファンの成績はあまり良くありませんでした。それでも代替サービスを放棄してシーズンに臨んだのは、今年のアジア大会の選抜においてある程度の言質があったからこそ可能だったという合理的疑いが十分にあります。

問題はその後です。宣監督は選手を実力で選んだと答えると、金議員は記録が作成された A 選手と B 選手を例としてあげて誰を選ぶのかと尋ねました。

A は LG 呉ジファン、B は KIA 金宣ビンでした。金宣ビンは KIA 主力遊撃手であり、昨年の打撃王です。記録を見ると誰が見ても金宣ビンが良いです。しかし 2017 年の記録です。アジア大会は 2018 年 9 月に行われます。今年の代表選抜時点である 6 月 11 日までリーグで呉ジファンの成績は 74 安打、打率 3 割、4 本塁打 33 打点、金宣ビンは 58 安打、打率 2 割 9 分 3 厘、1 本塁打、28 打点でした。

特に金宣ビンは昨シーズンが終わって足首の手術を受けました。シーズン序盤は通常のコンディションではなかった斗山の金ジェホも大小の負傷によって似たような状況でした。それでも金議員は KBO が提出した議事録に出てきた通算成績を続けて参照して、二人の選手の今年の記録が重要な根拠だと提示しました。

そして「最近という 3 ヶ月の数値が呉ジファン選手に非常に有利に作用した」とし、兵役免除の故意性があると主張しました。3 ヶ月の成績を見れば呉ジファンが遊撃手 2 位となるが、今はコンディションが悪くなくても金宣ビンや金ジェホらが今年の成績が良かったので選ばなければならなかったという意味に見えました。

これに宣監督は確かに話をします。彼は「時代の流れと青年の気持ちを理解できなかった点は申し訳なく思います。しかし選抜に関しては私の考えが正しいと思う。現在のコンディションが最も良い選手を使うのが監督だと思う」と答えました。

続いて「通算成績はこれまでしてきたことなので選ぶと見ることもできますが、どんな監督に聞いても体調

が悪い選手を名前だけで使うことは、私は絶対にはないと思う。今年のアジア大会の場合、気候が特に暑かったので体力的な部分を考慮したし、ベテランよりも若い選手を選んだ」と言いました。

請託がなかったと主張している監督の前で、今年9月に行われた大会において昨年の成績でもって問題を提起しているので、記録だけでなく現在の実力とコンディションを総合的に判断して選抜した宣監督の所信発言がむしろ愚問賢答になってしまった感じでした。

加えて、民主党の孫へウォン議員の場合は野球に対する理解自体も著しく不足しています。主要な選手選抜と関連した兵役議論ではなく、宣監督が国家代表前監督に選任されたことに対する問題を出しながら年収がいくらなのかを聞きました。宣監督は「2億ウォンである」と言うと孫議員は「KBO関係者に聞いたら公費は無制限だと言っていた」と追及し、宣監督は苦笑を浮かべ「決してない」と答えました。

続いて代表監督として勤務をどのようにするか聞きました。宣監督が中継を介して試合を見ていると言うと、年俸2億ウォンを受けとっているのに出勤もしていないが、日本ではそうではなく現場に義務的に行くと言って、脈絡と全く合わない内容である宣監督の勤務形態と態度を指摘しました。そのように「とても気楽にしているのではないかと叱責するや、宣監督は「違う」と答えました。

孫議員は「入場料を出すファンのおかげでプロ野球があり、宣監督の年俸もこれで支払われるが、宣監督のせいで20%程のプロ野球人気が消えた」と声を高め、「アジア大会の金メダルはそんなに難しい優勝だとは思わない。謝るか、辞退してください」と宣監督を突き上げました。

兵役恩恵をめぐる疑惑を暴いて、誰が見ても貧弱な根拠である選手たちの昨年の記録や宣監督の専任監督制を引きずってきたことは仕方ないと見ることもできますが、正確な証拠無く「盲人、象の足に触れる」式の質疑だけしたのでは、「請託は決してなかった」という宣監督の主張に反論するには全く不足でした。

呉ジファン論議と関連して国家代表コーチングスタッフとKBOは各球団が、この間の慣例に基づいて兵役未了の選手を代表チームに入れたことに対する疑問は明らかに改善しなければならない部分です。しかし、野球監督が選手選抜をするにあたって、国会がこの選手やあの選手が合っていると主張して野球の理解が全くないまま選手たちのメダルの価値をおとしめ、むやみに叩いたのは、誰が見ても典型的な形だけの国政監査に過ぎませんでした。

<https://sports.v.daum.net/v/20181011055101279?d=y>

## INFOMATION

体育市民連帯 ソウル市 瑞草区 瑞草洞 1485-3 スンジョンビル 305号

체육시민연대 서울시 서초구 서초동 1485-3 승정빌딩 305호

Tel : 02-2279-8999、E-mail : [sports-cm@hanmail.net](mailto:sports-cm@hanmail.net)

ホームページ : <http://www.sportscm.org/>

日本語訳 : 佐藤好行 新日本スポーツ連盟 国際活動局 韓国担当 [jr1fgep@jarl.com](mailto:jr1fgep@jarl.com)